

優雅にのみは啼けない

——アスクの白鳥 ヘンリー・ヴォーン

森 田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) の三作

目の詩集『アスクの白鳥』*Olar Iscannus* (1651) ——以後、本稿では『白鳥』と略記——は、殊の外多彩で豊饒な作品集である。実は筆者の「ヴォーン小考」は、この詩集の最初と五番目の作品を凝視めることから始まった。ヴォーンの〈詩人〉を育んだ彼の故郷ウェールズの清流アスク川を讃えた「アスク川に寄せて」*"To the River Isca"* と、その川を含めた美しい自然の故里の町へ、引退した友人を招こうとする招待詩「彼の引退した友人へ、ブレックノックへの招待」*"To his retired friend, an Invitation to Brecknock"* (『小考』(一) 3-5、8-11) に詳注拙訳・紹介あり) である。筆者自身、それによって、ヴォーンに〈招待〉されてしま

ったのだった。

本稿は、この二篇に挟まっている三作を順にみてゆくことから始めたい。『白鳥』は、ヴォーンが最初の『詩集』(本誌前号で取り上げずみ) 刊行後すぐに取りかかって、翌一六四七年に出版しようとしながら、献辞付きの作品を政治上の理由から取り除くなど配慮をしているうちに刊行が遅れた事情があつて、それだけに熟成度の高い作品の集成になつているように見える。

死体安置所 The Channel-house

おや、まあ! この湿り具合ときたら? 何と濃密な空

気なんだろう、

霧の〈子宮¹〉、もう一つの〈光あれ²〉の気遣い、墓と暗闇の装飾壁、〈展示³〉なのだ

減んだ人間の、そして昼日中の病氣、

痩せ細った 血の気のない修羅場、そこに私には見出せる、人間の〈破片⁴〉、〈組織〉の〈切れ端〉を、

腐敗の化粧室を、人類の

移植可能な寝台を、死者たちの〈宝庫⁵〉を。

どれ程汝は 私の感覚を捕えることか？ 見ただけでどれ

程私の〈冬支度ずみの〉血が強ばって どの喜びも台無し

にすることか？

〈シビレイ⁶〉なのだ 〈眼〉には！ 僅かな一瞥だけでも
我らの激しい欲望は凍りつき、向こう見ずな人間は救われ

るのだ、

雄弁な沈黙だ！ 〈不信心者⁷〉の思想を

〈閉じ込め〉、〈享樂主義者⁹〉を萎えさせる。

もし私がルーキアーノスなら こういう衣装の〈自然¹¹〉は

私に〈救世主〉を求めさせ、〈告白〉させることだろう。

どこにあるのか 君たち岸辺のない思想は、途方もなく

張り伸ばされた希望は、

野心満々たる夢は、〈果てしなく〉広がる〈目的〉は？

その伸び広がる〈過度〉は余りにも一連なりになって行き
自己拡張の伸ばし台の上で死ぬことになるのでは？

華麗な〈カメレオン¹³〉、〈空気を食べる¹⁴〉一群は、

その呼吸が（〈火葉〉のように¹⁵）陸地を吹き飛ばすのだが
君の解体を見にやってきて あれこれ考えるのだ、

君がそのうちどのように忌み嫌われる無になるのかと、

〈諸元素¹⁷〉が〈循環〉によって 一方から

他方へと移り動くにつれて、すると最初にあつたものが

再びそうなって、それがそのまま君の状態になる、墓

と〈自然〉とだが〈共謀〉で、一方が与えるものを

他方が取るのだ、だから〈考えてみよう〉、この寝台で

眠るのは 君のと同じように厳しくて明敏であると同時に

誇り高い頭の〈遺骸〉で、同じだけ多くのことを

成し遂げたか無理強いしてきたかなので、その嵐の怒りが

〈王様〉を奴隸と同列にしていしまい 賢明にもそれからは

こういう並々ならぬ憤激は鎮まつて 人民へと降りてゆく

のだと。

こうしてキューロス¹⁹はマケドニア王を宥め、墓が

彼を抑えたので、彼は世界は余りにも狭苦しい〈部屋〉だ

と思ったのだった。

私は従つてしまったのか ある顔の持つ《**権力**》に、
従順な人の 《競争》をなかつたことに出来る

美しさに？ 私は唯ここで見ていて、単刀直入に

《知らされる》のだ、見事な《偽物》は

実際より滑らかな《粘土》にすぎなかつた。あの飢えた

奴隷は⁽²⁰⁾

富むことで貧しくなり、救えるようにと極貧になつて

こちらへ自らの経帷子を持つてくる、《否》、《ダチヨウ

兵士》⁽²¹⁾は

鋼鉄や弾丸を常食にするが その彼は自らの《統治権》を

一層激しく罵つて 乱暴に応じられるのだ、親切な

言葉に、まるで自分の舌は《揉み革》⁽²²⁾であるかのように、

それなのにここでは《塞ぎ》⁽²³⁾こんで、愚かなのか恐れを知

らないかする虫どもが

彼を今や平然と侮り、死は《熊》⁽²³⁾から、武器を奪い去つた。

こうして私は誤りを犯す人たちの哀れむべき一覧表を

全てざつと調べることが出来たし果したのだ、もっと当然

と思われることを、

彼らの混ざり合つた《意志》を、不毛な無駄な《意図》を

風変りな気分を、危険に満ちた《昇進》を

偽せの空虚な名譽を、不実な喜びを、

そして、やみくもの《奇想》が《招く》ものは何であれ、

しかしこれらと 弱い害虫が増やすもつと多くのものとが

私なら撒き散らせるこの《累積する細胞》の中に

《隠されている》のだ、《しかし》《太陽》はしぶしぶ

自らの光線を呼び込んで 私に立ち去つてしまうようにと

警告する、

昼間は二重の夜のうちに私から去つてゆくので、私は

私の悲しい書斎⁽²⁵⁾に別れを告げなければならぬ。とは言え、

以上はここまで。これ以後は汝のことを思いながら

私は続いて起るあらゆる《お祭騒ぎ》に趣を添えることに

しよう、

それでも浮かれ騒ぎ⁽²⁶⁾はとんでもないし、考えすぎは相応し

くない、

過度には《宗教》もなければ《機智》もなく

激しい血は放埒な氣質にまで膨れ上がる筈なので

汝からの一つの《抑制》でそれを再び《水路に戻す》⁽²⁸⁾こと

にしよう。

訳注

- (1) *Kelder* = womb (オランダ語 = cellar) から [M・七〇五]
- クリーヴランド『王の変装』(J. Cleveland [1613-58. 英国詩人、王党派]『*The King's Disguize*』の「太陽は真夜中は消える、昼日中は擧めつ面をし／雷光は雲の『kelder』の中にある」で、この語を見たのか [M a・一七四]
- (2) a second *Fiats* care the *Fiats lux* (= Let there be light) [創世紀] 1・3
- ダンの「暴風雨」(Donne's "The Storme" 70-72)「あらゆる形状を一樣な変形が／覆うので、我々は神がもう一度／光あれ、と仰せられない／限り、日中にはもはや恵まれな」を参照 [O・ii・三三六]
- この主旨は、この死体安置所の闇と無秩序から光と秩序を取り戻すには、もう一度「光あれ」が必要だ、というもの [R A・四七一]
- (3) grave and darkness = dark grave「暗闇の墓」。「二詞一意」(hendiadys)
- (4) ward-robe「衣装戸棚」= dressing room 今は廃れた意味の「化粧室」(wardでは「死がしかるべき外観を備えた場所」[R A・同])
- (5) th' Exchequer = Treasury. Habington, "Elegie 8 to Talbot" 5-6「(ward)に富の縮図あり、この胸は／自然の主な、'Exchequer'…」参照 [M・同]
- 死ねば物は持つてゆけないという事実への皮肉な言及 [R A・同]
- (6) *Torpedo* 麻痺効果を生むものを指してこの語は使われた [M a・同]
- (7) Eloquent silence この撞着語法は、一七世紀の作家たちへ愛用された。例、Carew's "An Elegy Upon the Death of Dr.Donne, Dean of Paul's," ll.71-76 / Habington's "A Dialogue betwene Araphill and Castara" l.10, & "The Description of Castara" ll.13-16. [M a・一七四—七五]
- 'silent eloquence'「沈黙の雄弁」の例、Habington, *Castara*, "To a Tombe" l.4. [M・同]
- (8) An *Atheists* thoughts 誤ってづるせいで彷徨っているから [R A・同]
- (9) *Epicure* おそらく、宗教的な動機で行動しない人、とごく緩やかな意味で (*OED* *epicure* sb.1b) [同]
- (10) *Lucian* [117-180c] ギリシヤの諷刺作家・修辞家。「人間性の余り思慮深くない面に訴えるのが巧みだった」(*OCD*) [同]
- (11) Nature…Confesse こういう装いの自然なら私に、救世主の存在を希わせ、彼を信じると認めさせるだろう [同]
- (12) tenter'd「布地を伸ばす張り枠」(tenter)で張り伸ばす

れた。二〇行目の「皮革伸ばし台」(rack)と同義語で使われ、「布を引き伸ばす」という暗喩が持続する [Ma・一七五]

- (13) *Chameleons* 極小の虫を一瞬で長い舌で捕食するので空気を食べていると信じられた。体色を変えようと相俟って無節操、不合理に上昇を望むこと、の象徴とされる。

シェイクスピアの『ハムレット』(Ⅲ・ii・九八―九九)「大変結構です。カメレオンの御馳走を食べて、ほくは空気を食べて空約束で満腹です」(*OED* に引用) [Ma・一七六]

諺もある。「人間はカメレオンのように空気を食べては生きられない」“A Man cannot live on air like a chameleon.” (M・同)

- (14) *Aire-monging* つれが「空気を食べる」の意なら、ヴォーンは方言 ‘munge’ (=eat) を使っている [RA・同]
- (15) *Gun-powder* マリラが考えるように [Ma・一七六] ヴォーンが特に清教徒を念頭に置いているなら、彼らはカトリック教徒同様だと言っているのだ、「火薬陰謀事件」the Gunpowder Plot [カトリック教徒が強圧的な法律への復讐として国会開始日(一六〇六年一月五日)に議事堂を爆破してジェイムズ一世と上下両院議員を殺害しようとした]と火薬が強く連想されるので [同]

- (16) *a loath'd nothing* Habington, “Elegie 8 to Talbot” 36 に

同じ句がある [M・同]

- (17) *As th' Elements...so again* 基本元素発生についてのアリストテレス理論では基本四元素「空気、土、火、水」は絶えざる流動のうちに各元素は、互いに浸透の循環によって他の三元素の中に入ってはまた単独の姿に戻っている [Ma・同]

- (18) *descend to men* この最も真意に近い意味は「死を免れない」という避け難い事実を記憶する [RA・四七三]

- (19) *Thus Cynus...a Room* マケドニア王(アレクサンドロス)はキュロス「ペルシャ帝国の建設者、王、c 600-529 B.C.」の墓の碑銘をみて、人間は必ず死ぬものだとの思いに落胆した。プルタルコス『対比列伝「英雄伝」』(アレクサンドロス 69) [Ma・同]

Fellham, *Resolves*, I, xiii 「キュロスの墓を見て、その最も気高いアレクサンドロスはどれ程落ち込んだことか」参照 [M・同]

- ヴォーンのエウエナリスの諷刺第十歌の訳、二八―九〇行目「マケドニア王は一つの世界では受け入れられなかっただろう／我らは彼が狭い〈土地〉に不平を鳴らすのを聞く」参照 [F・五八]

- (20) *That famish'd slave* 甚だ憎まれていた高利貸しを指す [Ma・一七七]

- (21) *th' Ostrich-man* 金属や石を食べる習性があると考えら

れていたダチョウのような食事をする兵士。議会派議員を指すひねった表現「Ma・同」

- (22) *Buffe* 兵士のジャケットの素材となる「わ」わした皮「L・五八」

- (23) *Bear* 粗野な不法な人を指す慣用語「Ma・一七八」

- (24) *in a double night* 訪れてくる実際の闇と、消沈した精神の闇「Ma・一七九」

- (25) *my sad library* 死体安置所は、人間の儚さについて鍛えるような注釈を内包している点で「悲しい書齋」「Ma・同」

- (26) *nith* 「我が気高い友人 R・W に」の訳注 (3) 参照「続小考」(四) 3」

- (27) *Yet damn not...nor Wit* からのこの二行、清教徒の厳格さと彼らの宗教上の熱狂を軽蔑して一瞥している「Ma・同」

- (28) *Chanel it* 適切な進路へと向け直す。この詩の語柄である「Chanel」との、音の類似を利用しての地口であろう「Ma・同」

美しい川を讀えた作品の直後に、「汝」と呼びかけながら「死体安置所」で話者が雄弁な瞑想に耽る詩が来る。作品の配置が既に〈奇想〉ではないか。一読とにかく面白い。

ヴォーンの全作品の中でも最も技巧に富む作品であり、作者が伝統的な「死体安置所」の主題を使って挙げた実際の効果を見損なつて、無意味な実験にすぎないなどという上滑りな受け取り方をしてはならない、と逸早く指摘したマリラの正当な評価が嬉しい。一六四〇年代後半に、議会派議員たちの軍事力が日増しに強化されてゆくのに気付いたヴォーンの、国への危機感に触発された作品であり、彼らへの微妙且つ強力な否定の表明、それがこの作品だったとマリラの言うとおりのものだろう「Ma・一七二―一七三」。

作品の標題の「Chanel」と、最後の、再び〈水路に戻す〉「*Chanel*」との見事な地口の意味するもの、それは、この「死体安置所」のような状態が、現在の英国なのであり、それを正しい水路で打開しなくてはならないという、ヴォーンの警鐘であった。国の現状を正しい流れに戻そうという、彼の作品の殆どとさえ言えそうな、これは寓意詩なのだ。

二三行目と六四行目が九音節以外は全て十音節詩行二行連句、六六行の作品。

この「死体安置所」の次に、高利貸の友が現れる。

高利貸の友に In Amicum foeneratorem (1)

ありがたい 強力な〈銀貨〉よ！ ぼくは分つて嬉しい
ぼくがお前を使ったことで 彼の検約を駄目にしてやった
ことが。

お前が一たび去ってしまうと 彼はもつと多く私に欲しが
らせようとする

彼の〈匣〉の金貨を、そしてぼくに取り戻させようと買取
する。

非力な磁鉄鉱が〈北方〉の同意を得て

自然に従いながら 自らの〈元素〉へ向かつて動くように、
本体がその〈中心〉へと一斉に向かい、あの 人間が

天から盗んだ火が やはり天へと昇りたがるように、

この莫大な泣き叫ぶ金額は 少額のほうを回収するので

それ故この袋はもつと〈北方に〉置かれたと私は思うのだから
それには〈北極星〉の力がこの領域では作用するのだから

とは言え、多くの中でも最も小さいものが親熊を支配する

のだが。

借金の特権！ どのように彼は 自分の言わんとすること
を〈チャリン〉で装うのだろうか？ (一言)も

読むのに手数料のないものはない、だからそれは適切だ、
金貨は機智を復活させる強壯剤なのだから、
おお 彼がそれらを鍍金する仕方ときたら！ どれ程心楽
しくぼくが

それらを何行も読んだことか、〈天使〉がお〈書き〉にな
っているものだからね。

しかしお金の〈オグ〉はあるかつて？ ぼくが支払わね
ばならない？

〈詩人の〉呪いしか君に役立つものはないのかって？

〈祭壇〉をこんなふうに略奪する？ そして直ちにさつと

集めるのかい

〈オルペウスのように〉ぼくが木偶坊から無理やり引き出
すものを？

そんなことをしても君の〈財布〉は決して膨らまないし、
君の暗い

〈胸〉で鐘二つ鳴りはしない。〈州長官〉や刑務所のこと
は言わなくていい、

ぼくはそんなもの怖くない。ぼくには君の浅ましい食欲を
十分満たす土地はない、だから君に何エーカーも

ニムロド気取りで闊歩してもらうさ、ぼくには〈発言〉の

用意がないよ、

君の跡継ぎ〈有望な鵜⁽²²⁾〉の 機嫌を取るようなのはね。

それでも君の言いなりの〈王国〉がある、もしも君が

この屑を蹴とばしさえするなら、パルナツソス山の花咲き

乱れる崖鼻を

ぼくは君にあげよう、我がテムペー溪谷⁽²³⁾にずっと沿って

るし、更に

あの、足で泉を打った馬⁽²⁴⁾。

〈薔薇〉の〈寝台〉を君に提供しよう、そうすれば

〈水晶〉の〈泉々〉が君に美しい旋律を滴らす筈、

息づく木陰を我らはしげしげ訪れるだろうが、そこでは木

々の葉という

葉が〈囁いて〉は我らを眠りに誘うのだ、尤も君は耳^{みみ}しい

なのだが、

これまで誰もが愛そうとしなかった あの

おどけた〈妖精たち〉にも我らは〈愛する⁽²⁵⁾〉気分を教え、

彼女らの唇の〈珊瑚〉を吸い込んで 芳しい

香りの呼吸に 必要な時の食事に 満足し、

彼女らの〈琥珀の垂れ房髪〉の中を彷徨ってあのきらめく

小森を、〈渦巻いた〉黄金の森を、開き広げて

それから覗き見ながら 赤子たちを、新たな〈人形芝居⁽²⁷⁾〉

を、探して 彼女らの

べちゃくちや喋べる〈眼〉が言っていそうなことの謎解き

をする。

しかしここで君は支払うことを思い出さねばならない、

何故ってお金があればこれは全て〈呪い〉となるから、

君は更に多くの財布を請い求めてかつて一度あったように

この〈鉄の時代〉を黄金に戻さなくてはならない、

これこそ君の為すべきことだが、これが全てではない、

こうしてその〈詩人〉は尚も奴隷状態のままだろうから、

君はだから（もしこのように生きるなら）多くの蜂蜜の巢⁽²⁸⁾

として

古い契約を解消して もっと多額の借金をするように請わ

なくてはならないのだよ。

[M・四三―四四]

訳注

(1) = To his friend, the Money-Lender [RA・四七三]

(2) his = the money-lender's 彼の高利貸 [同]

(3) Now thou...to restore 今からのこの二行、最初の借

- 金（銀貨）を返させるために更に多額の借金（金貨）をせよとする [同]
- (4) that fire...from heaven プロメテウスの伝説への言及 [同]
- (5) this vast crying summe 二番目の「金貨」の借金 [同]
- (6) this bag 少ない方の額、最初の「銀貨」の借金 [同]
- (7) rules the master-bear 北極星は小熊座にあり、その星座と大熊座は共に北極星の廻りを回転している。A. U. Chapman, "Henry Vaughan and magnetic philosophy", SR, IV, 3 (1971), pp.215-26. の説明 (p.220) が役立つ。「小額の借金は金貨の提供より強い引力（もっと北方へと）がある。少ない貸し金を取り戻そうとして高利貸が誘えるもの」と思う金貨は、実際はその少ない額のせいで語り手「借り手」のポケットに引きつけられるのである」[同]
- (8) Prerogative of debits 借金の特別の力 [RA・四七四]
借金の優先、高利貸の見解、あらゆることを考慮して [Ma・一八一]
- (9) *Chink* 硬貨、そのチャリンという音から口語でそう呼ばれた (*OED* *chink* *sb*³ 3) [RA・同]
- (10) not an Exprese = not an single utterance (*OED* *express* *sb*² 2) [同]
Express = Injunction 「勧告、指示」、借金を返せという催促 [Ma・一八一]
- (11) gold's the best restorative of wit 黄金に備わっていると思われている治癒力への機智に富む言及 [RA・同]
G・ハーバートの「全ての御使いと聖人へ」"To All Angels and Saints", [五行詩六連の詩、WIL・二八一―二]の「一―二三行目「黄金は／あらゆる衰退への優れた強壮剤だ／老いにも若きにも」参照 [M・七〇六]
- (12) them その高利貸の語る内容、'messages' [同]
- (13) Angels 一、精霊の存在であること 二、大天使ミカエルの像を刻印されていた金貨 この「一」と「二」とを融合する、当時馴染みの地口 [同]
- (14) Og バシヤン (Bashan) 「ヨルダン川東方の肥沃な牧草地帯」の王オグの滅亡は「申命記」3・1―11、「詩篇」136・20に語られる [F・六〇]
- (15) オグの破滅は、強力な者をその弱小の敵対者の手に渡す神の力の証拠として旧約に言及される。この名をおどけて使うことはそれ故、破滅させたいと望む者を指し示す [RA・四七四]
Swine (イノシシ、豚) は高利貸を指して特に面白がって使用された用語だったことに鑑みて、作者はここで特に別の、豚を表す語 'Hog' を示唆する語として 'Og' を歓迎したのか [Ma・一八一]
- (15) disburse = disburse の変化形 (*OED*) [RA・同]、四五行目に再出。

- (16) Altar 詩人の卓の「神聖さ」をおどけて指したものであろう [同]
- (17) sweep at once = gather in at one stroke (OED sweep v 8) [同]
- (18) stocks and stones 木石、無生物、無気力「不活発」な人、頭韻を使用。
- (19) What Orpheus-like...stones せっかく冥界から妻エウリュディケーを連れ帰れることになりながら、約束に背いて振り返ったために、永久に妻を失った、ギリシャ神話中のオルペウスの挿話を想起させながら、作者は、詩人が金銭を得ることの困難をユーモアで表現したのだろう [RA・同]
- (20) Shrews = Sheriffs の廃れた形 (OED) [同]
- (21) Nimrod of acres 「創世記」10・8-9に出てくる強力な狩人で、暴虐と高慢な野心との象徴となった [F・六〇]
- Feltham's Resolves II, ix ("Of Prayer") の「もし私が世界のニムロッド連中や地上の貴族たちに知られなかったらどうなるだろう」を参照 [Ma・一八二]
- (22) Comorant 鵜には「貪欲な人」の意味がある [RA・同]
- (23) Tempe ギリシャ東部テッサリア地方のオリュンポス山とオッサ山との間の魅力に富む溪谷、景色の素晴らしい所、

景勝地を表すのに用いられる。

- Greene [Robert, 1558-92] の「彼らは鵜か利用者たちな…」(OED に引用) 参照 [RA・四七四]
- (24) That horse...his foot オウイディウス『変身譚』V.256-7「新たな泉の名声が私の耳に届いていたが、それがメドゥーサの翼を持つ馬の硬いひづめの下に潰き出した」(レープ版)。この泉とはヒッボクレーネー(字義どおりには、「馬の泉」)で、詩神ムーサイたちにとつて神聖なヘリコン山にあった。この馬、天馬ペーガソス。「打った」(struck) は「打つことで泉を産み出した」[RA・四七五]
- (25) fit = humour, mood (OED fit sb² 4c) [同]
- (26) Peep for babies 次行の妖精たちの「眼」の中に。この奇想は、眼の瞳 (pupil) を表すのにラテン語の 'pupilla' (小さな女の子) を使う故に生じた [同]
- マリラはボラードのヘリック論 (Alfred Pollard, Robert Herrick: *Hesperides and Noble Numbers*, 1898, The Muses' Library, i. 262) を引用している。「眼の中の赤子」という暗喩は、おそらく、凝視している人の眼の中に凝視められている人の小さな姿が映っていることから生じたもの [Ma・一八三]
- (27) Puppet-play 'puppet' の二つの意味、一、人間を示す小さな姿(人形)、二、操り人形、を地口で表したものの

(OED) puppet sb 2 & 3) [RA・四七五]

- (28) nest of honey 金と蜂蜜の、色の類似性に基づいた、からかいの親愛を示したもの。ヴォーンの世俗詩には、十七世紀の諷刺喜劇への親昵ぶりを示す所がかなりある。こゝは Jonson, *The Alchemist* [1610] を想起させる [同]

マリラの鑑賞を聴こう。語り手に少額の借金が返せなくなった。負債に関する連絡を貸し手から受け取る。語り手はその手紙で、更に多額の借金を勧められ、それを受ける正当化を示唆される。それから返済を迫られ、最後の手段として法律に訴えるという脅しが来る。この詩の最後は語り手の返答である。彼は答える。そんな脅しは怖くない、喜んでこの借金は、心の豊かさでもって返済すると。そして詳細な描写によってその鈍感な高利貸を「無邪気に」滑稽にしてみせる。そして驚きの結末がくる。提供されるのは返済ではない、この高利貸自身の見解を逆手に取って彼に要求する交換は、彼の全ての「金貨」を直に没収する、というものである。[Ma・一七九—八〇]

ルネッサンス期の社会では、経済、倫理、宗教上の理由から、広く憎しみの対象となっていた高利貸業者に専ら注意を向けている作品であるが、マリラの断言するのとおり、

個人的な苦情の反映などを観る必要はない。

十七世紀の作家一般が示した高利貸への蔑視は、エリザベス朝の文人たちの先例を受け継いだもので、ヴォーンも例外ではなかったということである。この詩の劇化されている内容の把握には、徐々に概念が印象深く展開されてゆく手法と、全般的な暗示法に、読者が活発に想像力を働かせる必要がある。そういう作品の典型であろうか。

八行目と最後の二行が一一音節である以外は全て十音節詩行二行連句五二行の作品。

次に、詩人仲間らしい友人への語りかけがくる。

彼の友人へ—— To his friend ——

思うに、ジェイムズ、時代の全ての〈歴史〉を通じて、貧困は〈必然の継承〉⁽²⁾だと定まっているのではないかね(詩人たち)に、〈弁護士諸氏〉は見つけた(そうだ)よそれを切り棄てる策略を、彼らがほくらに唯それを実践してくれようとすればいいものを、尤もこういうことを求めてほくらは彼らに

賄賂や報酬を(もし可能なら)支払うことになろうが。

搜したまえ（君に出来る限り）⁽⁴⁾ ローマの古代の貯蔵所を
ぼくらの現代のそれを、あらゆる才人の一覽表⁽⁵⁾の中に
君には裕福な人は見出せない筈だ、どの《地域》も各々
《受け容れ》て時のあらゆる巡礼の旅を完うしたまえ、
君は彼らが貧しいのに出会い、到る所で発見するだろう
擦り切れた 黄金のない系譜を。

自然は、ぼくらが《大地》を意味した（らしい）時
自らの甚だ多くの宝を、誕生の際に、その後
吝嗇⁽⁶⁾になってから同様費したので、《彼女》は
こうして内部に蓄えられ、ぼくらを外部で物乞いにする。
悲しむべき浪費！ どれ程高価にぼくらは作られて
いるのか？ 検約して豪奢になる望みは全て

詩作のために失われた、ぼくは考えを巡らして、時の
子宮の中を振り返り、《責め道具》⁽⁷⁾がそこでは
役に立たないと判り、それで遂にぼくらは拷問に
掛けられるに到り、ぼくらの魂が染み込まれて⁽⁷⁾
苦痛を色々知るようになる《時》、ぼくは思い始めるのだ
暴君の中には 鎖で繋いだ奴隷の中から

自分の楽しみのために何か長持ちのする術で
苦しめ続けられる者を選び出す連中がいるように

ぼくらも唯、舞台上に放り投げられた愚か者の浮かれ騒ぎ
とか、時代の《伝説》⁽⁸⁾にすぎないのではないかと。
ぼくは衣服一式の残骸⁽⁹⁾の中で⁽¹⁰⁾

何かもつと高貴な胸や、彼の悲しくも無言の舌が

彼の《眼》の《声を出す》沈黙⁽¹¹⁾を糧としてゐるのを、
知識は治療には到れないと判る時、

卑し気な特質の魂が無数に輝いて⁽¹²⁾

その群全体の中で彼だけが貧しい時、

フランスの猿⁽¹³⁾どもが外国のはやりの風俗に代金を払い
イギリスの脚が異様とつぴな衣装で飾られて

甚だ美しくもあるので彼らは己自身の影に求愛するが

そうしながら彼は 悲しい《巡礼者靴》⁽¹⁴⁾で歩いてゆくので

私は《運命》に激怒し、罪になる程までに立腹して

功績と学識が大層薄く覆われているのに気付き

考えるのだ、どのようにこの世の《高利貸》は自らの

財布を思い煩い、貴重な食料⁽¹⁵⁾を麻痺した手で

量れるのかと、まるで自分の魂が恐れているみたいに

その《秤》が 自分がそこに置いたものを彼から奪い取り

そうだと、

隠⁽¹⁶⁾されている《宝物の数々》を守っている《悪魔》か、そ

れとも鼻先の

向うは信頼しない 嫉妬に狂った〈眼〉の持ち主のように
彼らはその汚物を護り、その明るく光る〈偶像〉をしっか
り抱き締めて、黄金との姦淫を〈犯す¹⁷〉のだ。

彼らの滓に〈呪い¹⁸〉を！ どれ程ぼくらは願ってきたこと
か 散らばった〈屑片¹⁸〉を少々？ どれ程しばしば請願し
続けたことか 赤面しながら、彼らの魂の健康のために
ぼくらのため以上に一銭でも絞り取れることを望んで？
スティーヴ・リップド
彼らの鋼肋材強化製〈戸棚〉と〈財布〉は（共に錆に食わ
れる！）

大量の書類でぼくらに多くの誓いを立てさせ

甚だ厳肅な意味での〈抗議〉をさせたのだ、

まるでぼくらの魂は〈金錢〉の担保でもあるかのよう。

たとえばぼくらが 終夜に及ぶ習熟した世話を提供しても

彼らはぼくらに短い一時間の〈満足〉を返してくれること

も殆どないだろう、

ああ全く！ 彼らは言い逃れにすぎない、ぼくら〈詩人〉

が捏造するものだ、

頭脳の発する短命な〈爆竹〉であり〈癩癩玉〉⁽¹⁹⁾なのだ。

しかしぼくらはもつと賢くなつて弁えよう、彼らではな

いのだ、

ぼくら独自の苦難を救うに相違ないのは、と、
〈もつと高度な力〉か、あの最も近い天体⁽²⁰⁾でありながら

地球からは最も遠い星が ぼくらをこのように圧迫するの
か、あの〈天体⁽²²⁾〉からぼくらの厳密な〈守護天使たち⁽²¹⁾〉に
よつて護られている星が ここで不運なままであるのか
それは問題ではない、ぼくらはいつか必ず手に入れるのだ
ぼくら本来の、そして〈天空の〉、広がり⁽²³⁾を 再び。

[M・四四—四五]

訳注

(1) この「友人」、明白には正体不明のままだが、第一行の
「ジェイムズ」から、モーガン嬢 (Miss Morgan) は、James
Howell (*Epistolae Ho-Eliauae* の作者) ではないかと推測
する [C・ii・三三六—三七] が証拠はない [RA・四七
五]

ギニー (L. I. Guiney, "Lovelace and Vaughan: A Specula-
lion" *The Catholic World*, XCV [1912], 646-55) は、
オーンは一六五〇年に出版の用事でロンドンへ出かけて、
一六四八年以降急速に尾花打ち枯らした境遇に陥ったラブ
レース (Richard Lovelace, 1618-58. 英国王党派の抒情詩

人、たびたび投獄され余生は悲惨だった)に会い、それがこの詩に靈感を与えたのではないか、と推測する [Ma・一八六]

- (2) *Entails* 「貧困は詩人の譲渡され得ない遺産」 (Poverty is the inalienable inheritance of poets) とふう考え。この法律用語は次行の 'Lawyers' と呼応するが、ヴォーンが法律を学んだ学生だったことを反映しよう [Ma・同]
- Jonson, "An Epigram to King Charles": 'the poet's evil, poverty' 「詩人の悪、貧困」 参照 [R・A・同]
- (3) A trick to cut them = a device to break entails [同]
- (4) as thou canst 一、君が出来るように (友人のラテン語の能力への讃辞) 二、君の気のむくままに (まだ見つからないので好きなだけ熱心に捜す) [同]
- (5) in all the witte score = in the entire list of poets [同]
- (6) Thus stor'd within, beggers us outwardly 自然(彼女)は精神の事柄で詩人たちを豊かにし、「外部の」事柄で貧しくする [同]
- (7) our soules infused 即ち、我らの身体の中へ [R・A・四七六]
- (8) Legend = account 「記述」説明 [M・一八六] / 'byword' 「常套句、通り言葉」と多少なりとも同義か [R・A・同]
- (9) ruines of a sute = rags 「はら」 [同]
- (10) When I see...: reach the remedie 何々からのこの四行、「私は、誰か気高い精神の人がほろを纏い、無言で欠乏を表しているのを目にし、癒しようのない彼の窮状を知ると...」 [同]
- (11) Voall silence 効果満点の撞着語法。黙っていても、いやそれ故に尚更、声に出す以上の叫びになっている。
- (12) in their store = in their abundance (*OED* store sb 4C) [R・A・四七六]
- (13) *French apes* フランスの流行を模倣する者たち [同] / 一六四〇年代にフランスの衣装が導入されたことに言及 [Ma・一八七]
- (14) *Pilgrim-shoe* ヴォーンの造語。*OED* は、'Pilgrim' が修飾語として使われる多くの例を挙げているが、何々での意味は「巡礼者の靴がそうなるだろうように擦り減って」 [R・A・同]
- (15) food 何々では、高利貸の生活を支える利子 [同]
- (16) Like Divers that on hid Treasures sit レジナルド・スコットの『魔術の発見』 (Reginald Scot's *Discovery of Witchcraft*, 3rd edn. 1665, chiv.) に付されている匿名の書物の次の一節を参照。「...隠されている宝の保護者のような精霊は...その発見で得る人間の利益や便宜を極度に嫉妬し、金が秘められているような場所に纏いついてその発見を目指す人々の生命や四肢を損なう邪悪・猛毒な力を保持して

いる」[RA・同]

- (17) Commit adultery with gold それを「偶像」'Idol' (前行) にするのだから。バイブルの表現「偶像・邪教などを崇拜する」"go a whoring after..." [「出エジプト記」34・15、16 / 「申命記」31・16] [同]

- (18) Chips 何か価値のない、取るに足らないものの典型と考えられる (OED chip *sb.* 5a) [同]

- (19) Squibs and Crackers of the brain この句、現代で言う「rattling of the brain」[「頭がガタガタ鳴る」とほぼ同じ。Feltham, "Of Resolution" (*Resolves* I, ii) の「頭脳の爆竹」と舌癰瘻玉 (tongue-squibs) については、それらはそのまま死ぬだろう、私が蘇生させなければ」の反響 [Ma・一八八]

- (20) that stare...most far フトレマイオスの体系でいう「Saturn」[土星] (意地悪な影響力の源として悪名高い) [RA・四七七]

- (21) Guardians = guardian angels 「守護天使」[同]
(22) angel'd = '(?) governed by angels from Saturn' 「天使たちによって土星からの影響力を受けている」か [M・七〇六]

= 'driven out' by angels 「天上の警察力に相当する天使たちに追い払われた」 [J.I. Guiney, 前掲論文 P・六四九]

この動詞はヴォーオンの造語で、この文脈では、一、天使

たちによって導き出され (led out) て、二、世話される (attended) の二重の効力がある [Ma・一八八]

- (23) Whether a Higher Power ... again この最後の六行の基、本は、魂は世に生れ出るまでは肉体を持たない存在だが、死によって肉体から解放されると、また元のその状態に戻る、という新プラトーン派の観念だ [Ma・一八九]

三、四五、六四行目の三行が一一音節、三五行目が九音節である以外は全て十音節詩行の二行連句全六八行の作品で、今まで取り上げた三篇の詩型は同じである。

この詩の標題の後に線が引いてあって、友人の名前の省略が目立つようにしてあることに、マリラはやはり注目している。出版者が当初は付けるつもりだったものを省いたというその痕跡を除去するのを怠ったのか、それとも、友人の特定を故意に控えたことを強調するための、作者自身の手法だったのかと [Ma・一八六]。さすがであるが、現代の読者としては、事実の如何に拘らず、文芸作品としての巧妙な〈技法〉と受け取るべきものであろう。訳注 (1) のように、熱心な読者に、この「友人」の特定を促したり、マリラに先刻のように考えさせたりするのだから。

高利貸の友人が話柄だった作品の次にくるこの詩も、金

銭の話題に関わっていて、繋がりがある。「死体安置所」

の最後に「水路」のイメージが出てくることで、その前作のアスク川の水と繋がる、というわけで、作品の配列にも微妙繊細な感覚が働いていることが判るだろう。この作品の後が、引退した友人を招く件の詩である。その詩に続く二篇は、本小考シリーズで既に紹介済みである。

まず、「トンボー氏」“Monsieur Gombaud”である。ゴンボー氏のフランス語の散文ロマンンスであるエンデュミオン⁽¹⁾の物語を英訳で読んだヴォーンの、言わば読後感想詩とでもいうべきものであった（「続小考」(三) 13-15）。その次に来るのが、本誌前号の最後に取り上げた、戦死したR・W氏の死を悼む哀歌である（「続小考」(四) 40-43）。悲痛なこの作品に直統するのが、友人に借りた外套を話題にする実に奇抜な、悲しい程滑稽な次の名作になる。

J・リスリー氏⁽¹⁾によって彼に貸与された外套について
Upon a Cloke lent him by Mr. J. Ridsley

さあ 再び君の《痛悔服》⁽²⁾を受け取りたまえ！ やれやれ君の《礼儀正しさ》⁽³⁾に私は殺されませんだよ、《まさ

か》ないよね

我らが死ぬのは少しずつか即座かのどちらかなんて両方共破滅にはちがいないのだから、それなら差し当って私の苦痛を栽培して私に投げ与えたらどうかね

この無理に作った《網代櫓》⁽⁴⁾を 負債を燃やすために。もし私がこの《厚手の上掛け》⁽⁵⁾を纏ってロンドンの近くで

目撃されていたら 疑いもなく処刑されていただろう、何か大胆なアイルランド⁽⁶⁾のスパイの廉で、そして囚人櫓の

向うで

めちゃくちゃに切断されていただろう 四つの門と櫓に掛⁽⁷⁾

けられるように。

初めてそれを身に着けた時、私は圧迫された足に

どうしても説得されねばならなかった、これは《鉛の死

衣》⁽⁸⁾なのだと

それ程に深い《印象》を受け、それ程に危険な穴が開けられたので

私は自分には足裏があるのかと疑い始めて

一步ごとに《必ず、といつてもよい程だったか》⁽⁹⁾ 誰か

正直な《靴直し》がそばに居て欲しいものと心底願ったがおまけに非常に丈が短くて その《ユダヤ人の》ぼろ服は

《割礼を施されて》⁽¹⁰⁾ いるかとみえたが、《非ユダヤ人の》

毛羽立った布地⁽¹⁰⁾だったのだ。

君はあの日 私とずっと一緒に居たのだが、やがて我らが
峨々たる《ピーストン城》⁽¹¹⁾とあの運命を決した《デ---

川》を後にした時、

新たな暴風雨と最近の不幸に襲われた時、

それは《外套》と《帽子》の役を兼ね備えて、何と
みえたものだった 私の雲のかかった頭の辺りで
分厚い《ターバン》か《弁護士たちの背の飾り布》のよう
な姿に、

他方ごわごわした窪んだ襷がどの側にもあつて

《鬚付き皮革》から雨のように注いでいる《導管の筒》の
ようで、私には分るのだ 君ならあの日⁽¹²⁾の運命にも拘らず
私の新しい見かけや状態を見て 君らしくどっと笑い崩れ
薄笑いを一、二度浮かべて はっきり言うことだろう
誰か《イスラム教徒》が《継ぎ接ぎ衣服》を失くしたんだ
など。

見たことあるだろう (世間で言う) 善良な妻が

進んでゆくのを 短い外套を着て《洗礼式の》日に、
そして可能な限りの柔和な動作で《教会》に挨拶し

《衰弱した母》を見殺しにするのを、丁度そのように私は
《よろよろ歩いた》が、その間私ののろまの馬は とぼと
ぼ歩いていた

痛風の《判事》に悩まされる《巡回》動物のように。

しかしこれは《民間の》だった。私は爾来ますます

多くの悪質になってゆく悪ふざけを知っている、《或る》
晩(これまで君が承知のように) 着替えがないので(私と
私以前にはピアス⁽¹²⁾が行ったもの) 私は横たわったのだった
全くの《裸で》⁽¹³⁾そして唯、その目的のためだけに
決意してそうしたのだった 私の親友のために。

おお 君が翌朝そこに居てくれたらよかったのに、私は
君に新たな《小宇宙の縮図》⁽¹⁴⁾を教えてあげられたのに！

君なら私を、私が裸になっている時、

洪水前の七本の柱⁽¹⁵⁾の一本だと思えたことだろう

《記号》と《象形文字》⁽¹⁶⁾は一晚で

磨耗されたので 君なら断言してももつともだろう

私は《蠟引き布》⁽¹⁷⁾に包まれたままでか 狂った人たちが藁
にくるまって寝る《精神病院》⁽¹⁸⁾で 眠っていたのだと、私

には思い留まれないのだ

君たち皆に告げるのを、彼の無謀な《特徴》と策略が

私をスピードの描く古代ブリトン人、あるいはピクト人のように思わせるのだと、

彼の悪辣で痛烈な《針金抱擁》は、私の中にしつかり封じ込めてしまっていたのだ。《子供たち》が夢でも

見ない程の不思議な姿形と顔々を、あるいは君は読んでいたのだ

《アラス織り》⁽²¹⁾の中に《操り人形芝居》と《シヨウガ入り菓子パン》⁽²²⁾を、

それは角ばった《図形》だったり、《魔術師》などに操られるという

恐怖を引き起す《十字形》だったりした、そして更に近づけば君は思ったことだろう（そういう思いがけないことが

引き起された）

私はフエター・レインの或る粗削り像だったのだと、いや、私は信ずるに、もし私があの瞬間

《外科医》か《薬剤師》に目撃されていたなら

彼らは私の引掻き傷の肌を《非難した》だろう、歩いている《植物標本誌》⁽²⁴⁾だ、《解剖模型》だと言って。

しかし（勝利のお陰！）それは終わった。さあ助言しよう君、友よ、この品物を《商品化し》たらどうだい、

我らの時代の《行商人たち》はまだ商売をするから喜んで《晴天の日》にも《屋根》をしつかり備えるだろうよ。己が《商品》の安全を

確保できるようにと《どしゃぶり》の驟雨からね、

それは実現される筈だ、あるいはもしこうならなくても

《居酒屋の女将たち》⁽²¹⁾は必ず夢中にさせるだろう、それは一《部屋》⁽²²⁾を立派な二《部屋》⁽²³⁾にするようになって、一本

の棒の上に展がるのだから、

《石灰》や《レンガ》のない仕切り壁が。

《角の生えた》頑固！⁽²⁵⁾どれ程私の心は苛立つことか

それがどの《口》と《臂》を湿った日に

強ばらせるのかと考えると。これまで二ペンスで

ヘンリー王のウェストミンスターの《礼拝堂》を見たことあっただろう？⁽²⁷⁾

そこには《真鍮》⁽²⁸⁾と《寶石》⁽²⁹⁾製のくすんだ法服を纏った

《判事たち》⁽³⁰⁾が居て注意を引いたことだろう。その服の

各々には膝の辺りに頑丈な《大理石の》襞がついていて

両脚で均衡を高々と取っていたね？

丁度そのようだった。これも、思うにそれは織り合わさつ

たのだ

機織りを行使する頑固一徹、傲慢なブラウン一派の手で。

おお、君が断言してくれたらよかったのに、〈兵隊〉の

〈欺瞞〉の運命に私が初めて捕えられた時に！ どのような値段でその時それを私は買ったのだったか、何があったか〈簡潔にまとめた仮兵舎〉のために 私が支払ったもの

以外に？

私は思っているだけだ（もし重いのが喜ばしいことなら）

それは私を護ってくれるだろうと、ラップランド織りとか

〈魔法をかけられた〉繰り綿が詰め込まれていた

悪魔の鬚や顔が織り込まれているドイツのシャツよりは増しに。

しかし着終った。だから思わないでくれよ、私が

君の〈親切〉をこのように思いのままに〈冷やかして〉いるなどとは、

私は君にそれを感謝しており、信じているのだよ、私の

〈詩神〉は君には十分知られているので、悪用などとは思

われないだろうと。

これは彼女の仕業だったのだ、このように与えてもらった

君の愛情は

私の感謝の念と共に、君の〈外套〉と〈我々〉より長生きし

そうなのだから。

[M・五二―五四]

訳注

- (1) 依然として正体不明「H・六二―六三」
- (2) *Sack-cloth* 粗布衣、痛悔着、キリスト教の懺悔者の衣服、それ故この外套の着心地の悪さへのからかい「RA・四八六」
- (3) *Courtnip* = *courtesy* (OED *courtnip* 1b) [同]
- (4) *Hurdle* 枝編み細工と、もしくは針金製の枠だが、裏切り者を処刑に引いてゆく檻「F・七一」／外套の役を無理に務めさせてくれる檻、皮肉「RA・同」
- (5) *Rug* 同時代の当を得たニュアンスは OED に引用されている *Haknuyt* の「種々の色の上掛けを纏った粗野な状態の人々」が示唆する [同]
- (6) *Irish 'rug'* はアイルランドで作られたから [同]
- (7) *for their four gates and bridge* 処刑された四人の切断された死体の部分はしばしば市の四つの門 (*Alldgate, Aldersgate, Ludgate, Bishopgate*) の上とロンドン橋に犯罪抑止のために展示された [同]
- (8) *Leaden sheet* 多分一行目の *sack-cloth* の悔い改めのニュアンスを曳きずっている、*sheet* (死衣) は悔悟の衣服

でもあるから [同]

- (9) *so near necessity* 靴底の修理は殆ど必須といってもよい程だった [同]

- (10) *shag* = *nap* 「ラシャ・ビロードなどの表面の毛羽」
[M・七〇八]

切つてない、飾り付けのない長い粗布の毛羽。ユダヤ人でない人の着る布地なのにその毛羽が短かすぎたという諷刺 [F・七二] / (*OED shag* *sh*¹ 1c) 参照 [RA・四八七]

- (11) *Biston* = *Beeston Castle* チェスターの南東約九マイルの前哨地でデュー川から遠くない。王党派が一六四五年一月一六日に議会派に明け渡した [H・六五]

- (12) *Bias* [b. c570 B.C.] ギリシャの哲学者、七賢人の一人。イオニアのピエルネ生れ。その町が襲われて市民全員が物は棄てて逃げようとした時、彼は自分は物を全て持つて行くこと答えたという。See *Cicero, Paradox, i.8*. [F・七二]

- (13) *Admrite* 元来裸でいたアダムの模倣者(と)つ = *naked*.
[M・一一一一]

- (14) *Micro-cosmo-graphie* 上着の「わ」が彼の身体に、小宇宙の地図模様のような多くの線をつけた [RA・四八七]

- (15) *seven pillars* 「箴言」9・1で言及される知恵の七本の柱、及び、セスの子孫によって、アダムが予言していた

洪水から自分たちの膨大な発見物を守るために建てられた一本ずつの石とレンガの柱を融合したものを指すか [M・七〇八]

- (16) *Characters and Hieroglyphicks* 上着が彼に象徴の模様をつけたことをユーモアで示した [RA・四八七]

- (17) *Cere-cloth* 手術の際や経帷子として使われた布で、蠟や粘着性のものを染み込ませたり塗りつけた [F・七三]

- (18) *Bedlam* 精神病院として有名なロンドンの St. Mary of Bethlehem 病院 [RA・四八八]

- (19) *his, His* = *its* 病院の [同]

- (20) *John Speed* [1555-1629], *History of Great Britaine* 一六一年版以降の諸版に、刺青の絵で全身覆われた初期のブリテン人の裸の肖像が載っている。ピクト人 (*The Picts*) 「ブリテン島北部に住んでいた起源不明の古代民族」は身体に絵を描いていたのでそう呼ばれた。Book V, vii.8. [M・七〇八] [RA・四八八]

- (21) *Arras* 美しい模様のあるつづれ織り。

- (22) *Ginger-bread* しばしば入念な飾り付きの風変わりな形に作られた [RA・同]

- (23) *Fetter-lane* *Stow, Survey of London*, 1603, p.375. によれば、フエター・レインはフリート街の西で、聖タンスタン教会の東端のそばを延びていた。この通りに Edward Marshall (1578-1675) なる墓作りの名匠の石工の親方が住ん

でいて、そういう墓の飾りとなっている人物像が「粗削り像」か。六四行目に照らすと、有名な薬草医 John Gerard (1545-1612) も、この通りに住んでいたようだ [F・七四]

- (24) *Herball, or Anatomie* 植物や解剖に関する論文にはしばしば入念な図が入っていた [RA・同]

- (25) *Horn'd obstinate* おそろく角のように堅い上着の「かわした状態に悲鳴を挙げている」[同]

- (26) *how my heart... wet day* 雨の日はこの上着を着ている彼を見て、人々がおかしそうな驚きの表情を（口をゆがめ両臂を張って）みせた時の口惜しさを思いだしている [Ma・二一四]／雨の日はこの上着を着て身体に感じた不快さの表明とは思いう [RA・四八八]

「口」は即ち「顎骨」、「湿った日」には「道路は危険になる」[M・七〇八] この上着は骨折を固定する程強ばっていると考えたものか [RA・同]

- (27) *King Harrys Chappell* 王公・貴族の埋葬所として有名なこの礼拝堂は、ヘンリー七世によって一五〇二年に建てられた。多くの場合、各々の墓の上の死者の像は、真鍮、大理石、雪花石膏で表されていた [Ma・二一四]

- (28) *Judges* ヘンリー七世の礼拝堂には判事の記念碑はない。エリザベス朝の判事二人が近くのセントポールの礼拝堂に埋葬されている [H・四六]

「著名な人々」の意 [Ma・二一四]

イスラエルの士師たちとの類推による [RA・同]

- (29) *plets = pleats* 綴りを現代化すればおそろくヴォーンの発音を歪めるだろう。OED: plat, pleat, plet 参照 [RA・同]

- (30) *exercising 'preaching', 'prophesying'* 「説教する、預言する」の意を皮肉に表したものでだろう (OED exercise v 10 C) [RA・同]

- (31) *Brownists* 過激な清教徒 Robert Browne (1560?-1633) に従う人々 [F・七四]／清教徒の殉教者には職工が多かった [RA・同]

- (32) *Laplant-lease* ハビントンの「閣下では、まるでラップランドの魔術師に、弾に当たらないようにしてもらっているように安全に歩かれますよ」(Haddington, *The Queen of Aragon* 1. i) OED に引用 [RA・同]

- 一七世紀にはラップランドは魔術で悪名高かった。Lapland は 'Laplant witch' の短縮語だった。気まぐれにラップランドの魔術師が織った衣服なので魔力が付されていると考えている。尚、'lease' は「織機によじれた糸を交差させること」の意と解して、それを「織られた衣服」を表す提喻とみる [Ma・二一五]

- (33) *Or a German shirt... weavd int* 前掲の「彼の友人へ——」の訳注 (16) で言及したスコットの『魔術の発見』

には、「長持ちする胴着」の作り方が示されている。「クリスマスの夜、小さな処女が悪魔の名によって一本の糸を亜麻から紡ぎ、それを彼女が編み針で織り上げるのだが、その際、胸か前方で編み針を使って二つ頭部を作る。右側の頭には帽子をかぶせ、長いアゴひげをつけ、左側の頭には魔王ベルゼブブに似せた恐しい冠をのせ、胴着の両側には各々一個十字架を付けなければならぬ」(同書二二一頁)

〔RA・同〕

(34) She did this..thy Cloke, and Us への「彼女」は無論、二行前の「私の《詩神》」。詩は永遠だという型にはまった観念がまた反映されたもの〔Ma・二一五〕

友人に借りた外套を返しながら、それがどれ程着心地が悪く、着ているとスパイや犯罪人にみられかねない程見た目にも酷いシロモノだったかと、手を変え品を替えて展開する不平不満は、ユーモア、諷刺、皮肉のスパイスがたっぷり効かせてあるので、文句を言われる聴き手がむしろ浮き浮きと楽しくなって、貸してあげてよかったと思つたにちがいないと、読者もその喜びをごく自然に共有してしまふだろう。

不平を述べ、文句を言い、貶し誇りながら、感謝し礼を

伝え褒め讃えているのである。文句御礼、不平感謝、貶し褒め、なのだ。語句のレヴェルから内容全体への飛躍が成された《撞着》詩、ではなからうか。今のこの国には、リズリー氏が貸してくれたような外套が必要だと、この詩の語り手は訴えたのである。

冒頭の二行と、三六、四六、四七行目の五行が一一音節以外は全てナ音節詩行二行連句の全九八行の力作。

「死体安置所」は、パリー (Graham Parry) の言そのまま、直ちに「戦争と死の圧迫を避けたいと希う作者の欲望の脆さを指摘し」「内戦の経験を明白に喚起する言語で、死の恐怖と荒廃を記録する詩」〔H・S・五二〕であつた。友人 R・W の埋葬場所が判らず仕舞いになったヴォーンの恐怖は、この友人が「死体安置所」で詳述されるような《一般の死》として無名のままに終ること〔同・五三〕だったのである。この作品は、その直前の「アスク川に寄せて」と共に、ヴォーンの原点になっていると見做せられよう。

「死体安置所」で《メント・モリー》(memento mori: 「汝は死を覚悟せよ」を肝に銘ずることは、生命に限りある者がその限りある生命をよりよく生きるための、必須の方

法なのである。「水路」は正しく戻さなくてはならない。アスクの白鳥は、優雅に啼き澄ましてはいらなかった。

『白鳥』にはヴォーンの自作詩は十七篇収録されているが、本稿の四篇によって、その最初からの八篇と、オリンダ讃歌の二篇（続小考（三）20-24）に詳注拙訳紹介済み、合計十篇の拙訳が終った。

*参考文献

本誌『成城文藝』第二二一号（二〇一〇年六月）の拙稿末尾（二四—三〇ページ）を参照されたい。ここには本稿での直接参考文献のみを挙げる。尚、本稿中、「小考（一）」、「小考（十三）」は、本誌既連載の拙稿（第一九九号「二〇〇七年六月」〜第二二一号）を指す。

〔続小考（一）〕「補遺と増幅——ヘンリー・ヴォーン、『火花散る燧石』以後の」『成城文藝』第二二五号、19-47、二〇一一年六月。

〔続小考（二）〕「思いは弱まることなく——ヘンリー・ヴォーン『甦ったタレイアー』の世界」『同』第二二六号、

29-56、二〇一一年九月。

〔続小考（三）〕「対話精神の探求——ヘンリー・ヴォーン、呼応―初期と後期と」『同』第二二七号、1-36、二〇一一年十二月。

〔続小考（四）〕「愛」の詩による出発——ヘンリー・ヴォーン、国情を冷厳に凝視する」『同』第二一九号、1-48、二〇一二年六月。

『詩集』『詩集、ユウェナリスの諷刺第十歌の英訳付載』

Poems, with The tenth Satyre of Iuvenal Englished (1646)

『燧石』『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655)

『白鳥』『アスクの白鳥』*Olor Iscanus. A Collection of Some*

Select Poems, and Translations (1651)

『タレイアー』『甦ったタレイアー』*Thalia Rediviva* (1678)

〔C〕Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

〔F〕Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry*

Vaughan. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.

[H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.

[H・S] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Life and the English Civil War*. Cambridge : Cambridge University Press, 1990.

[J] Leishman, J. B. *The Metaphysical Poets : Donne, Herbert, Vaughan, Tynahne* Oxford : Clarendon Press, 1934.

[JH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston : Little, Brown and Company, 1854.

[M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford : Clarendon Press, 2nd ed. 1957. 本稿の底本。

[M・S] Marilla, E. L. *The Secular Poems of Henry Vaughan*. Uppsala, Harvard and Copenhagen, 1958.

[RA] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan : The Complete Poems*. New Haven and London : Yale University Press, 1976.

[T-T] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX*

SCINTILLANS. University Park and London : The Pennsylvania State University Press, 1969.

[W-J] Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.

[OCD] *Oxford Classical Dictionary*, 1949, reprinted 1968.

[OED] *Oxford English Dictionary*

尚 一連の拙訳で「〈 〉」付きは、原詩では大文字で始められる語句、コチック体は同じイタリック体の部分である。原詩での固有名詞は全て大文字で始まるイタリック体なので拙訳ではカッコ無しの普通の字体のままにする。

訳注のうち、出所表示（例えば「Ma・一二五」）のなごものは本稿筆者による。